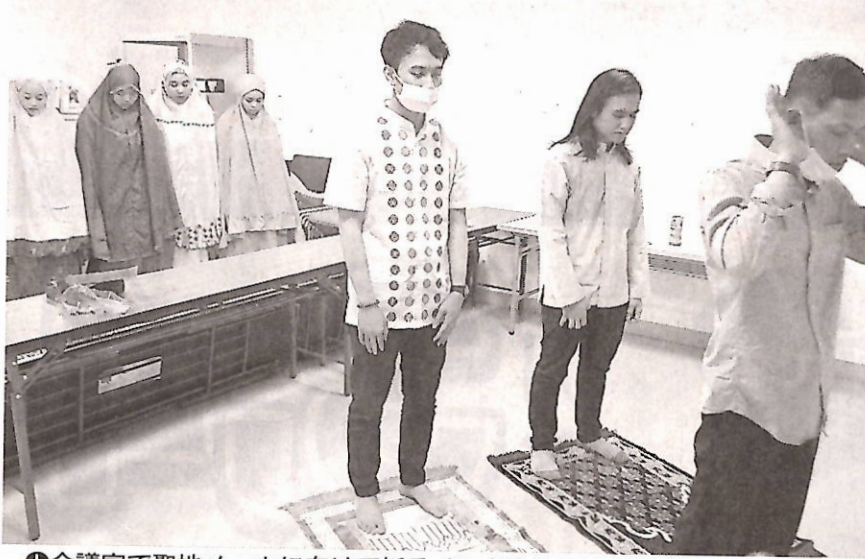


外国人介護職の信仰支える

高齢者介護の現場では、多くの外国人スタッフは、コロナ禍を生きるお年寄りに寄り添っている。川口市の特別養護老人ホームでは、信仰と仕事を両立して仕事に励む姿をみることが出来る。簡易モスクの場を用意するなど、施設側がスタッフの信仰を大切にする取り組みを進めている。



④会議室で聖地メッカに向けて祈るインドネシア人の職員たち
⑤祈りの後、管理栄養士が作ったイスラム食の夕食を食べるインドネシア人の職員たち
＝いずれも4月30日、川口市の川口さくらの杜

川口の特養

4月30日、日没後の午後6時半すぎ、「川口さくらの杜」の2階会議室にインドネシア人スタッフの男女9人が集まった。イスラム教徒が日中の飲食を断つ1年で最も神聖な月「ラマダン」（断食月、今年は4月13日ごろ～5月12日ごろ）の真っただ中。ナツメヤシの実をドライフルーツにした「デザート」を食べると、スマートフォンの聖地・メッカの方向を確かめて約10分間、礼拝を続けた。簡易モスクを作るきっかけとなったのは昨夏。ラマダン明けを祝う祭りのために、約20人のインドネシア



コロナ対策 施設に簡易モスク 正月は日本人に代わりカバー

人スタッフが近隣のモスクに行こうとした。ただ、当時は各地の高齢者施設でクラスターが発生していた。モスクでもマスクをつけ、3密回避のため全員を中に入れられないようにしていたというが、重症化リスクの高い入居者への感染リスクを考えないわけにはいかない。山下洋子施設長は「入居者を守るために行かないで」と呼びかけ、会議室を祈りの場に開放することを提案した。

インドネシア人スタッフも、感染リスクと祈りの環境をどうすればいいのかという不安の両方で悩んでいた。施設長の提案に、インドネシア人スタッフの間に安堵が広がったという。ラマダン中はインドネシア人スタッフに対し、体力を使う入浴介助を免除し、代わりに食事や排泄の介助、レクリエーションを多く担うように配慮した。来日10年目で妻子もいるユスリザルさん(33)は「本当に助かった。理解があるので安心して働けます」。

普段は1日5回、礼拝の時間を設け、イスラム教徒のスタッフは中抜けして順番に行う。女性が頭などを覆うスカーフ状の「シルバブ」の着用も許可。口にするものが宗教上禁じられている豚肉やアルコールを使わない食事を特養の管理栄養士が毎日用意している。川口さくらの杜には現在、20、30代を中心にインドネシア、フィリピン、ベトナム、中国の4カ国出身の計26人が在籍。母国の看護師資格を持ち、医療的な視点を加えて、入居者の健康状態に寄り添えるスタッフは貴重な戦力だ。

その多くが難しい日本語で出題される介護福祉士の試験に挑む。山下施設長は平日の週5日、有志勉強会を開催。異国で真剣に学ぶ同僚たちの真摯な姿に触発され、資格取得を目指す日本人スタッフが増えた。「ラマダンの時は日本人がカバーする代わりに、お正月はインドネシア人のスタッフが進んで勤務に入ってくれるんです」と山下施設長。リスクを分かち合う多国籍の「お互いさまの精神」が長引くコロナ禍の現場を支えている。(加藤真太郎)

普段は1日5回、礼拝の時間を設け、イスラム教徒のスタッフは中抜けして順番に行う。女性が頭などを覆うスカーフ状の「シルバブ」の着用も許可。口にするものが宗教上禁じられている豚肉やアルコールを使わない食事を特養の管理栄養士が毎日用意している。川口さくらの杜には現在、20、30代を中心にインドネシア、フィリピン、ベトナム、中国の4カ国出身の計26人が在籍。母国の看護師資格を持ち、医療的な視点を加えて、入居者の健康状態に寄り添えるスタッフは貴重な戦力だ。その多くが難しい日本語で出題される介護福祉士の試験に挑む。山下施設長は平日の週5日、有志勉強会を開催。異国で真剣に学ぶ同僚たちの真摯な姿に触発され、資格取得を目指す日本人スタッフが増えた。「ラマダンの時は日本人がカバーする代わりに、お正月はインドネシア人のスタッフが進んで勤務に入ってくれるんです」と山下施設長。リスクを分かち合う多国籍の「お互いさまの精神」が長引くコロナ禍の現場を支えている。(加藤真太郎)